第 13 回「全国日本語俳句コンテスト」選評

大下純子 先生

「題詠」

第１席　夕暮れやぶらんこ揺れてただ一人
日が暮れて人のいなくなった公園。一人ぶらんこを揺らして何を思うのでしょうか。色々な思いが溢れてきそうで、なんとなく人恋しい気持ちが伝わる一句です。

第２席　ぶらんこや漕ぐほど近し空の青
勢いよくぶらんこを漕ぐと空に近づくような気になります。よく晴れた日、空の青さが目に入り、より力強くぶらんこを漕ぎたくなる様子が感じられる一句です。

第３席　らんこや靴は空へと高く舞う
力強くぶらんこを漕ぐと、体が高く舞い、靴が空へと近づく。元気溢れる若い力を感じる活気のある一句です。

「雑詠」

第１席　秋出水シャベルマンの背逞しく
災害の際真っ先に救済に駆け付けたシャベルマンの様子がニュースで報じられました。被災地の人々はその逞しい姿を頼もしく思い、心から感謝したと思います。

第２席　水筒を振ればカラカラ夏部活
水筒の中のカラカラという音はきっと氷が入っているのでしょう。夏の暑い日、思いっきり汗を流し、水筒の冷たい飲み物を飲むときの爽快さは格別です。青春が感じられる一句です。

第３席　新蕎麦や修論千夜の窓明かり
修論を完成させるのに費やした長い時間。疲れて、ふと窓の外を見ると月が明るく、論文もうまくいく気がしたのかもしれません。学生らしい一句です。